

滝谷遺跡

— 寺務所・客殿の建設に伴う発掘調査報告 (TD2017-1) —

2020.07.31 富田林市教育委員会

1.はじめに(図1)

滝谷不動明王寺の寺務所・客殿建替工事に伴う試掘調査において、中世から近世にかけての遺構・遺物が発見されたことにより、「滝谷遺跡」として周知の埋蔵文化財包蔵地に登録し、本調査を実施するに至った。

滝谷不動明王寺は、弘仁12(821)年の創建と伝えられる真言宗智山派の古刹である。寛正4(1463)年に畠山氏の内紛による兵火にかかり、現在地に移ったとされる。近世の堂舎変遷は、村方の古文書によって一定辿ることが可能である。まず慶長5(1600)年に鎮守社が勧請され、元禄年間(1700年頃)には本堂・庫裏・鎮守社から成る小規模な堂舎であった。その後、江戸時代後半に病氣平癒の祈願所としての勃興が見られる。時期は不明だが、先に龍堂・茶所・香炉場が加わり、幕末の文政年間(1820年頃)以降に座敷や土蔵などが相次いで普請される。現在見られる壮大な堂舎や寺勢の隆盛は、明治時代の高取慈恭師による中興以降の姿である。



図1 調査地位置図

2.調査の方法と基本層序(図1・2)

第1期工事(旧寺務所・庫裏)の試掘調査は、平成29年9月に実施し、5箇所で試掘トレンチを設定した。その結果、中世・近世の遺物を含む包含層と、複数の三和土を確認した。第2期工事(旧客殿)の試掘調査は、既存建物の解体を待って平成29年11月に実施し、2箇所で試掘トレンチを設定した。うち1箇所で近世の造成によってつくられた切取斜面の一部を検出したものの、既存建物の建設・解体によって第2期工事部分の大部分は破壊されており、本調査は不要と判断した。

本調査範囲は、建設予定地のうち包含層が確認されなかつた第1期工事北半・第2期工事部分を除き、さらに仮設排水管設置箇所を避けたため、逆L字状の83.4 m²となった。平成29年10月24日に着手し、平成29年12月5日に終了した。重機を用いて解体土・旧表土を除去するとともに、試掘トレンチ跡を利用して土層の再検討を行った。その結果、試掘調査時に地山と認識していた層において中世の瓦片を確認した。

調査区南半の層序は、モルタル床を最上面として、江戸時代後半と江戸時代前半の三和土(土面)があり、室町時代のテラス状落込みを最下層とする。調査区北半の層序は、近代及び江戸時代後半に分かれる。

江戸時代は南半の三和土を基準に面的な検出を行い、中世は最上部の瓦溜まりを検出・除去した後にテラス状落込みを掘削した。当初は江戸時代の各面において遺構平面図を作成する予定であったが、中世の包含層もしくは遺構の調査に時間が必要と判断したため、江戸時代前半を除き略測で記録するに留めた。

3. 遺構と遺物

(1). 江戸時代前半(図2、写真1)

調査区南端、試掘Tr.2付近でのみ三和土が確認された。試掘Tr.2東側で三和土下より、江戸時代前半に属する土師質の埋甕を1基検出した。甕内面に屎石の付着は確認できなかったが、透水する性質の胎土であるため、トイレ遺構の可能性が高い。



写真1 埋甕出土状況（西から）

(2). 中世(図2～6、写真2・3)

調査地東側でテラス状落込みを検出した。遺構の規模は、上端で西辺7.2m・北辺5.1mで、調査区外南東方向に広がると思われる。肩部と底面の比高は0.25mから0.4mであり、底面はわずかに東傾するもののほぼ平坦である。人為的に地山を造成して形成されたものと判断できる。底面で瓦質鍋底部や瓦質皿が出土している。埋土は瓦・瓦質土器・土師皿・青磁碗片を含む粘質土である。落込みがほぼ埋められたのち、調査区外西側から大量の瓦が遺棄されたとみられ、調査区中央から南端にかけて瓦溜まりが存在する。

軒平瓦は何れも額貼付技法によるもので、和泉系の技術で造瓦されたものである。瓦当文様・形態から、山崎編年の和泉中世I・II期(1180年～1260年)、および同V期後半・VI期(1355年～1430年)の2時期に大別できる。前者は、軒丸瓦の巴文の隆起が著しいものがあることから上限をI期、連珠文軒平瓦の消長から下限をII期と考える。後者は、軒平瓦瓦当裏面が横ナデで調整されていることから上限をV期後半、波状文軒平瓦の存在からVI期を下限と考える。

瓦質皿は、口径が10.4cm～12.3cm、器高が1.9cm

～2.5cmに収まる。外面は側面下部に指押さえ、上部に横ナデを施す。内面は粗いハケの後に部分的なナデを施す。大半は天野山金剛寺編年の2期～3期(14世紀後半～末)に該当する。瓦質釜は、口縁部の内傾が強く、鋤柄編年の中河内・和泉中世IV期(14世紀後半～15世紀半ば)と思われる。瓦質鍋は、底径20.5cmで残高8.5cmである。外面は左上がりの細いタキをナデで消している。内面は左上がりのハケを施す。青磁は、端ぞり碗の口縁部が一片出土している。釉薬がガラス質のやや黄味がかった色味で、貫入が強い。外面は無文で、内面に陰刻による文様の一部が見える。沖縄埋文編年のV類(14世紀後半～15世紀前半)に該当する。

4.まとめ

瓦質皿の大部分は14世紀後半から末のもので、南北朝の合一が実現する前後、嶽山に畠山氏の諸将が陣を構えていた時期に相当する。諸将が寄進した日野觀音寺の大般若波羅蜜多經の奥書には「嶽山城不動堂辺」の文言があり、この不動堂が明王寺の前身とも考えられるが、伝承では嶽山北麓の不動山付近に存在したとされるため、現在地とは異なる。出土した瓦は完形になるものがほとんどなく、再使用に耐えないものを選別して遺棄したことが考えられる。瓦は新旧の2群に大別でき、新しいものは14世紀後半から15世紀前半に属するため、瓦質皿と同時期のものである。古いものは12世紀末から13世紀半ばに属し、鎌倉時代前半に遡る。同時期の土器類は確認できないため、他所から古瓦を搬入したものであろう。以上のことから、寺院の遺構であることは確実なもの、明王寺との関連性は明らかでない。

江戸時代前半のトイレ遺構の存在により、同時期の庫裏の位置が判明した。三和土・モルタル床の存在から、その後も近代にいたるまで、庫裏が調査区付近に存在していたと思われる。

最後になりましたが、快く調査にご協力いただきました瀧谷不動明王寺様、および関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

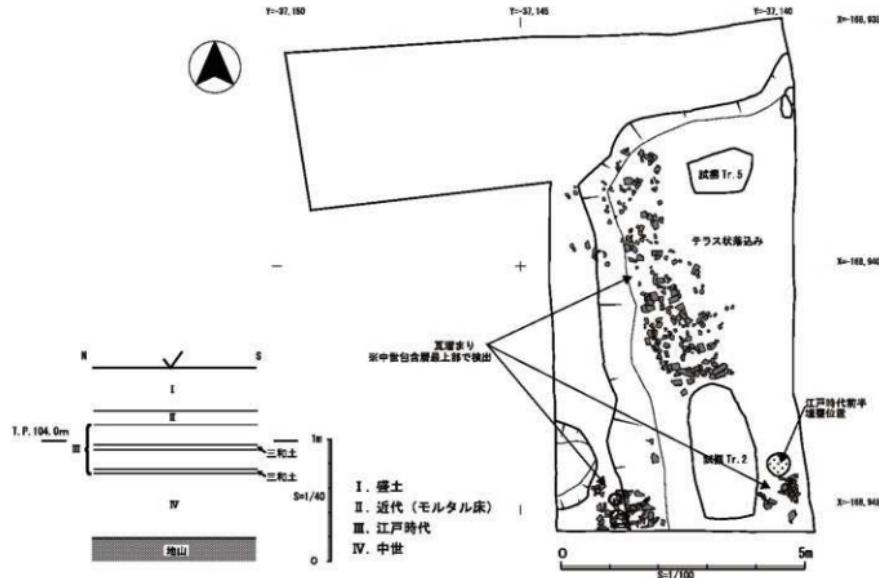


図2 基本層序

図3 中世遺構面・瓦溜まり出土状況

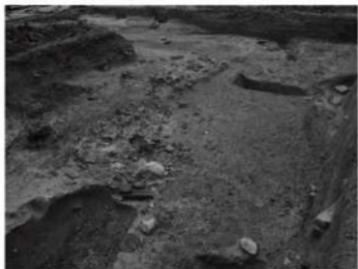


写真2 中央瓦溜まり出土状況（南東から）



写真3 テラス状落込み完掘状況（南西から）

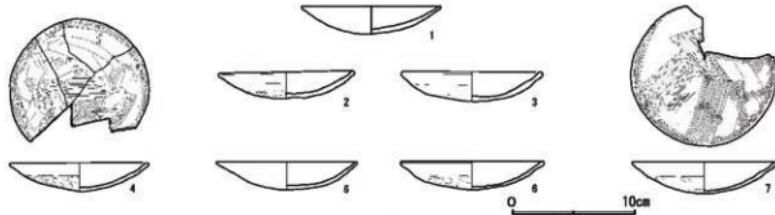


図4 瓦溜まり出土瓦質皿

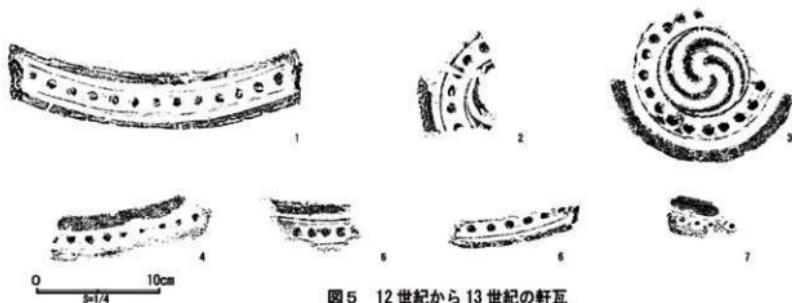


図5 12世紀から13世紀の軒瓦

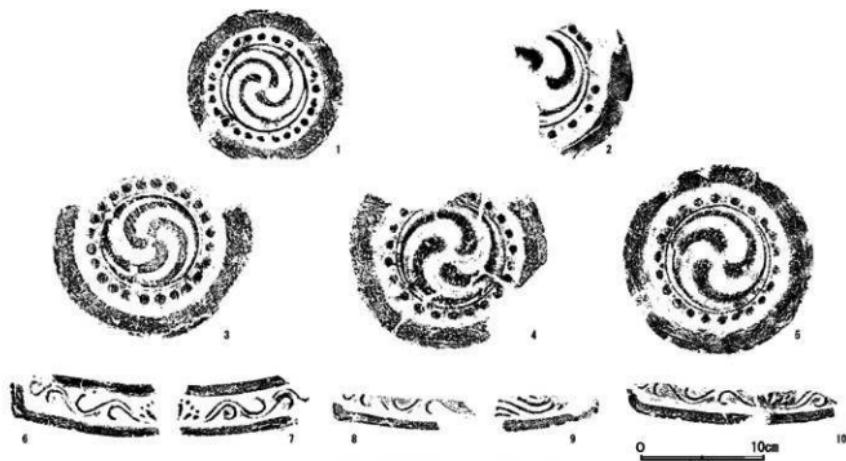


図6 14世紀から15世紀の軒瓦

報告書抄録

ふりがな	たきだにいせき							
番名	浅谷遺跡							
副番名	寺西所・客殿の建設に伴う発掘調査報告 (TD2017-1)							
シリーズ名	富田林市文化財調査報告							
シリーズ番号	88							
調査者名	林 正樹							
編集機関	富田林市教育委員会							
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 TEL 0721-25-1000(代)							
発行年月日	2020(令和2年)年7月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因	
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号						
浅谷遺跡	上記地図に示す位置	27214 59	34° 28° 35°	135° 35° 44°	2017.10.24 ~ 2017.12.05	83.4	寺西所・客殿の 建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物	特記事項			
浅谷遺跡	無尾跡	中世・近世	落込み・埋蔵・溝	瓦瓦土器・瓦・土師瓦土器				